

Isibhāsiyāim の言語学的註記

山 崎 守 一

初期仏教を研究する上で、ジャイナ教古聖典中に関係の文献資料が存在し、これら両教聖典の比較研究が極めて重要であることは周知の事実である。今問題とする Isibhāsiyāim (=Isibh.) もジャイナ古聖典の1つと考えられ、初期仏教研究に貴重な文献といわねばならない。

本邦において Isibh. は松濤誠廉先生によって邦訳がなされ、最近、谷川泰教氏の索引が発表されて研究者に一大便宜を供している。しかしながら、これまでのすべての研究を網羅した中期印度アリアン語の語源学辞典が存在しない現在にあって、本稿は Isibh. のより正確な理解に便を供したいと思い、非才を省みず、新しい語源を示唆しようとするものである。

(1) ajjhovavaṇṇa- (°vanna-) は Isibh. 28. (3) にみられる。Pischel (§77) は Skt において abhijāti, ābhijāti; pariplava, pāriplava; prativeśya, prātiveśya のように、接頭辞の初めの母音が時として長音化する現象が Pkt においても可能であると考え、ajjhovavaṇṇa=adhyupapanna とみる。この語は AMg のみならず、JM にもあらわれるが、多くのヨーロッパ人校訂者たちや辞書編纂者たちは Pischel のこの見解と同様である。例えば、Jacobi (Ausgewählte Erzählungen in Mahārāṣṭri, Leipzig 1886, s. 88; “Das Kālakācārya-Kathānakam”, ZDMG 34, s. 297), Leumann (Das Aupapātika Sūtra, Leipzig 1883, s. 93), AMgD s. v., PSM s. v. である。

J. J. Meyer (Hindu Tales, London 1909, p. 147 n. 2) は Jacobi や註釈家たちによって示された ajjhovavanna=adhyupapanna ではなく、Pāli ajjhopanna (Skt adhyavapanna) に相当すると考えた。また、CPD (s. v. ajjhopanna) は adhi-ava-√pad の過去分詞であることを示し、AMg の対応語 ajjhovavanna をあげている。この他に adhi-ava-panna と考える学者に W. B. Bollée (Studien zum Sūyagaḍa, Wiesbaden 1977, s. 180) がいる。

Childers, Andersen, Geiger は Pāli ajjhopanna をとりあげておらず、PED も語源を決定していない。しかしながら、Pāli において Skt o が ava に転訛することは周知の事実であり (cf. Geiger §26. 2), Pāli ajjhopanna < Skt adhyavapanna

は極めて自然な現象である。

ここで CPD の見解——Pāli *ajjhopanna* の AMg は *ajjhovavanna*——を採用すれば, Skt *-ava-* がどのようにして *-ova-* に転訛したか, すなわち, Skt *adhyavapanna* > Pkt *ajjhovavanna* がどのように可能であるかを解決しなければならない。Meyer と Bollée はこの解決として *uvaveya*=*upeta* (Leuman, *Aupapātika Sūtra*, Glossar s. v.) の例を提示する。恐らく *-va-* の省略化が可能であることを意味しているのであろうが, 依然として *-va-* の重複は疑問を残しているので新しい解釈が提示されねばならない。

そこで *adhy-ava-panna* は *ajjh-ava-vanna* と *ajjh-o-vanna* に転訛が可能であり, この *-ava-* と *-o-* の混成語が *ajjh-ova-vanna* と見做すことができよう。したがって *ajjhovavanna* の Skt 対応語は *adhyupapanna* よりも *adhyavapanna* が適していることになる。

(2) Isibh. 34, 10ff.: *no daṇḍeṇa vā laṭṭhiṇā vā leṭṭhuṇā vā muṭṭhiṇā vā bāle kavaleṇa vā abhihaṇati tajjeti tāleti paritāleti paritāveti uddaveti*. この一節は *no* と *bāle* を除いて 34, 17ff. で繰り返される。

ここにみられる *uddavei* は *ud-√vap* の causative, すなわち *udvāpayati* で *vyāpādayati* と同義であると考えられてきた。

しかしながら, *Āyārāṅga* (=Āy.) 1. 4. 1. 1.: *savve pāṇā savve bhūyā savve jīvā savve sattā na hantavvā na ajjāveyavvā na parighettavvā na pariyāveyavvā na uddaveyavvā* があり, 動詞

(Isibh.) *abhihaṇati*.....*paritāveti uddaveti*

(Āy.) *hantavvā*..... *pariyāveyavvā uddaveyavvā*

が対応関係を示している。

Pischel (§ 570) は *uddaveyavva*=*uddrāvayitavya* を与えており, これは語源的に可能な解釈である。Pischel のこの見解が正しいとすれば, *uddavei* は *ud-√dru* の causative *uddrāvayati* から由来して生じたことになる。ここで接頭辞 *ud-* は *upa-* から発展したものと見做すことができ, 意味は *upa-√dru* ‘to attack’ (MW s. v.) ということになり, 文脈にもよく適合する。

ところで, *uddavaittar-* ‘attacker’ が *Āy.* 1. 2. 5. 6 に *uddavaittā* (nom. sg) としてあらわれる。*Śīlaṅka* は *apadrāvayitā* とみている。また, PSM (s. v. *uddava-ittu*) はこの箇所を引用し, Skt 対応語として *uddrotṣ*, *upadrotṣ* を示している。Sheth は語源として *ud-drava-* あるいは *upa-drava-* と考えていることが推察で

きよう。

そこで uddavaittā は *ud-dravayitr の nom. sg. と解することができるが、むしろ, ud- に発展した upa- を伴った upa-drav- から生起したと解する方がよいであろう。

これに反して Schubring (*Ācārāṅga-Sūtra*, p. 70) は uddavaittar=*udvāpayitr と考えているが、上記の uddavaittar<*upa-dravayitr を否定しうる論拠を持ち得ない。

(3) Pkt には Skt の接尾辞に加えて、Skt に欠けている多くの接尾辞が存在するが、これらは特に taddhita 接尾辞である。また、Skt においてはほとんど使用されないが、Pkt においてはしばしば使用される接尾辞も多い。概して接尾辞の中には意義や機能のはっきりしたものが多いが、1 個の接尾辞が多様な意義をもつことも多く、分類は簡単にできない。

今、ここにとりあげる接尾辞 -ira (cf. Whitney, *Sanskrit Grammar*, 1226b) は、Pkt において多くの場合、kṛt 接尾辞として用いられ、動詞の語根に添えられて 1 つの形容詞を形成する。これは基本的には Pkt における現象と見做されよう。

Isibh. 6. (1) pāda d, 6. (9) pāda b: tatto vi judhire jaṇe にみられる judh-ira- もこの例である。その他、2, 3 の例をあげれば、rehira- (*The Kālakācāryakathā* W. N. Brown's ed., p. 41), kamkhira- (*Sattasaī*, Weber's ed. v. 55), ayampira- (*Dasaveyāliya*, 5. 1. 23; 8. 23) 等である。註釈書によれば、kamkhira=kāṅkṣaṇa-śīla, ayampira=ajalpaṇaśīla, ajalpitā であり、-ira が性質としての語根の概念を表現するとする Pischel (§ 596) の説明はこれらの註釈の立場に基づいているといえよう。

Schubring は註記の中で、judhira が 'fighting' すなわち、「暴力に訴える」を意味すると考えた。これは採用されるべきである。接尾辞 -ira は動詞の語根に添えられた時、形容詞を形成し、現在分詞に相当する意味をもつことになるといえよう。したがって judhira は動詞 √yudh に接尾辞 -ira が添えられた形容詞とみることができる。

この見解に基づくなら、kamkhira (kāṅkṣ-+ira)='wishing, desiring'; rehira (rekḥ-+ira, Jacobi (*Glossar* s. v.) は reh-<rebh- と考えたが、多くの文法学者によってこれまで reh-<rāj- と説明されてきた。この検討は別の機会に譲る)='shining'; ayampira (ajalp-+ira)='not speaking' であり、これらはそれぞれの文脈によく適合する。

(東北大学大学院)